

けて正反対であった。両先生の熱心なやり取りはなかなか興味深々というところであった。いまなら肺ガン騒ぎで早乙女先生の勝というところであろうが、そのときはいつ果てるか判らない論戦が続いた。若いわれわれは談話会とそちのけでききいったものである。酒もよし煙草もよしと悟ったのであった。

早乙女先生は、若いころからそうであったように、晩年になっても“時”については興味を持っておられ、お

会いする度にそんなことがよく話題に上った。たしかに誰もが興味をもつぐらい大発展を示したのであるが、先生にはとくに嬉しく感じられたのであろう。そしてときには示唆に富んだお話をぼつりと話されることがあった。ありがたいことだと思った。いつまでもまことによい先生であった。ここにその思い出の一端を記して、心からご冥福を祈る次第である。

早乙女先生を偲んで

藤田 良雄*

ローソップ皆既日食観測 30 周年記念会を神田の学士会館で催す話を中野さんと相談し、その時の隊長であった早乙女先生に出席していただきたいと思い、私が先生のお宅まで伺ったのは5月の末頃か6月の初旬であったろうか。先生は最近はいくらか弱られたといえ、しっかりしておられ、若し身体の調子がよければ出席させてもらいますということで、私は非常に喜んで先生のお宅を辞した。7月4日という日がきまってから先生の奥様から出席しますというお電話があり、当日となった。当日は京都、金沢からも出席があり、早乙女先生を中心とした和やかな集いになった。先生は自らたって30年前の当時のことをいろいろ思い出しながら回旧的に話され一同深い感銘をうけた。

それから間もなく御逝去の知らせをうけ、私は呆然としたのであった。私の早乙女先生に対する追憶は限りなく深い。昭和6年大学を卒業して直ちに就職した東京天文台で、当時は勿論今のように部制がしかれていなかったが、私の仕事は実験室における基礎的な実験と共にもう一つの大きな仕事は早乙女先生の下で当時すでに購入されていた塔望遠鏡の装置を組み立てることであった。16メートルの塔の上にシーロスタットを設置し、また地下室に大きいガラス分光器やグレーティング分光器をおいて太陽の分光観測ができるようにすることであった。先生は黙々として塔にはいって来られ、進捗状況をじっと見ておられた。何ヶ月かの後ようやく使えるようになった時私は先生のいつもと変らない温容に安堵の色があるのを見逃さなかった。一方実験室の仕事は田中務先生の指導のもとに行っていたが、この部屋へも先生はよくはいつて来られ深い関心を示されその進捗状況についていつも注意しておられた。

先生の観測に対する真面目な態度は忘れがたいものがある。ことに観測装置に対する取り扱いの慎重丁寧な態度は私には測り知れない深い思い出を残した。私の学生

時代に麻布の教室の先生の部屋におかれていたファブリービュイソンの実視測微光度計をどんなに先生が大事にしておられたかを思い出すと心が痛くなるような思いである。観測装置をあれ程大事にしておれば観測もよい成績をあげることができようと、その頃から私は思いを深くした。

それから昭和9年、前に述べたように南洋ローソップ群島に皆既日食があった時、日本としては初めての大きかりな日食観測隊が編成され、天文以外の地磁気、電離層の人たちも加わった。その時の隊長として先生は参加された。言葉数は少ないが、いつもおかし難い威圧感があった。威圧感といっても慈愛に満ちたものである。服装、態度はいつも崩れることがなかった。終始そばにいて私たちはますます先生の学究的態度に心を打たれた。

先生は旅行されるのがお好きであった。終戦後まもなくだったと思うが、郷里にいた私の父から早乙女先生がひょっこり家に訪ねて来られ全くびっくりしたという手紙を受けとったことがある。非常に厳格ないわゆる典型的な英国型紳士ともいべき先生ではあったが、また自らユーモラスな点も持っておられた。デパートでひょっこりお目にかかってあわてたのは私だけではなかったと思う。

一昨年先生の米寿を記念して何か差し上げたいと先生に申し出た時先生はなかなか承知されなかった。しかし私たちのたつての願いにとうとう先生もまけてそれではといて懐中時計を所望された。先生が時計に対し造詣が深く、めずらしいコレクションをお持ちだったが戦災で失われたときいたが、どんなに残念に思われたことだろうと思う。

いつも黙々として、しかし慈愛に満ちたまなざしをもって私たちをみつめていて下さったことを考えると、89才という天寿を全うされたとはいえ、いつまでも日本の天文学会をじっとみていただきたかったと深く考える。

* 東大理